みんなで防ごう土砂災害
「土砂災害防止月間」
6月1日～6月30日

毎年各地で土砂災害が発生しているため、六月を「土砂災害防止月間」として、国と都道府県が市町村などと協力し、「みんなで防ごう土砂災害」をテーマに、様々な活動をしています。「土砂災害防止月間」の取り組みの一つとして、土砂災害に関する絵画・ポスター・作文をみなさんから募集しています。

この作文には、鹿児島県の中学生が土砂災害について教わったこと、考えたことなどが書かれています。みなさんも土砂災害について家族や近所の人に聞いて、思ったこと、考えたことを作文に書いてみましょう。

「災害が教えてくれたこと」

令和5年度　「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部　優秀賞（事務次官賞）
鹿児島県　瀬戸内町立古仁屋中学校　一年　千葉　航之介（ちば　こうのすけ）

六月二十二日の夜、僕の家は床上浸水の被害に合いました。梅雨前線の影響を受け、奄美地方に「線状降水帯」が発生したのです。

僕は二年前からこの家に住んでいます。父を埼玉に残し、親子四人で暮らしています。父の代わりにがんばらなきゃという思いはありましたが、こんな被害の時にその時がくるなんて、想像もしていませんでした。

周りの様子から、「危ない」と思ったときにはすでに玄関に水が入ってきていました。僕はあせって、

「早くひ難所へ行こう。」

と、言いました。僕は、父の代わりに家族を守る手段は「ひ難しよう」というくらいしか思いつきませんでした。妹は怖くて泣いていました。

ひ難を開始すると、川の氾濫によって僕の腰の位置辺りまで水位が上がっていました。とても怖くて、母の手をぎゅっとにぎりしめていました。

・避難所へ着くと、集落の方々が心配して声をかけてくれたり、タオルなどを持ってきてくれたりしました。泣いていた妹も、近所のおばちゃんに笑顔で話していました。集落の方々の親切によって僕の不安な気持ちが和らぎました。

けれども、家のことが心配で、外の様子ばかりが気になりました。雨は降り続き、やむ気配はありません。心配で、寝ている場合ではないと目をこすり過ごしました。

夜中に水が引いたという連絡があったので、母と二人で家へ向かいました。懐中電灯で照らした家の中は、泥まみれで、とても臭かったです。僕は絶望を感じ、もうこの家には住めないかもしれないと思いました。朝、あらためて家に戻ると、被害の大きさがわかりました。柱には上昇した水位の跡が残っていました。中の様子を見てすぐに、住める状態ではないことが理解できました。

家の様子を見に来てくれた集落の方々は、

「大変だね。うちの家に泊まってもいいよ。」

「なにか必要なものがあれば言ってね。」

など、優しい声をかけてくれました。ぼっかりあいた僕の気持ちを埋めてくれるようでした。

埼玉に暮らす父も心配でかけつけてくれました。父の顔を見てほっとする自分がいました。父も家の様子をみながら、

「これはすごいな。怖かっただろう。だけど、みんな無事でよかったよ。」

と言いました。

家の片付けは、ものすごく大変でした。へんな匂いはするし、水を含んだ畳はものすごく重たくて運び出すのに苦労しました。床を拭いたり、泥を水で洗い流したりしました。そんな時にも、集落の方は手伝いをしてくれました。時には、おにぎりなども差し入れてくれました。親戚でもない僕たちに、とても優しくしてくれる集落の方の気持ちがうれしくて、片付けにも力が入りました。またこの家に住みたい、この優しさあふれる集落から離れたくないという気持ちが強かったです。

みんなの協力のおかげで、泥まみれの家もきれいになり、戻って来ることができました。まわりの方々の協力がなければ、この家に戻ってくることは出来なかったでしょう。

僕の住む集落にはお年寄りがたくさんいます。歩くことも不自由なお年寄りにも早めのひ難を呼びかけ、お手伝いしたいと思いました。集落の方々から頂いた優しさの恩返しがしたいです。

幸い、この雨の被害で、僕の家は片付けをして住めるようになりました。しかし、この雨により同じ町内の違う場所では、土砂崩れにより道路が遮断され、通行止めになりました。また、土石流により、みかん畑やハウスが大きな被害を受けたところもあります。もしも僕の家にも大きな岩が押し寄せたらと思うと怖くてたまりません。道路や、畑被害は僕の家と違って、元に戻るまでには時間がかかるし、僕以上に、気持ちも減入るかもしれません。けれども、人的被害がなかったことが、唯一の救いだったと思います。

今後、どんな災害がおこるかわかりませんが、父のかわりに家族と自分の命を守る行動が出来るように心がけたいです。

僕は、今回、このような被害に合いましたが、人の優しさを感じることができました。そして、何より、家族が無事であったことが一番だったと思います。

「もしものときの助け合い」

令和五年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部　優秀賞（事務次官賞）
鹿児島県　大和村立名音小学校　四年　上野　百葉（うえの　ももは）

「えっ、どうして家に帰れないの。」

六月二十日火曜日、わたしは母と弟と学校から家に帰ることができなくなり、学校にとまることになってしまいました。

わたしは、小さいころから新体操を習っています。大会が近くなり、団体の選手に選ばれたいという思いが高くなっていたころでした。そのために、毎週火曜日に体育館で自主練習に取り組んでいました。この日は、授業中からザーザーふる雨の強い音には気づいていましたが、わたしは練習に夢中で、雨のこともすっかり忘れていました。

実はこの日、わたしが住む奄美大島周辺は、線じょうこう水帯が発生し、大雨が長時間ふり続いていたのです。そのせいで、家に帰る道がかん水して通行止めになってしまいました。だから、わたしと母と弟は、家に帰ることができなくなったのです。

初めてのことで、どうなるのか不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、学校の近くに住んでいる教頭先生もいっしょに泊まってくれることになりました。わたしの不安な気持ちは少し小さくなりました。

しばらく学校ですごしていると、おなかがすいてきました。学校にあったおかしや母が持っていたアメなどを食べていましたが、なかなかおなかいっぱいにはなりませんでした。そのとき、大雨の中、校長先生がカップめんとおにぎりを持ってきてくださいました。

「校長室のテレビを見ながら、ゆっくりすごしていいよ。」

とおっしゃいました。わたしは、うれしくなり、校長室ですごすことを考えると少しわくわくしてきました。校長室で、教頭先生と母と弟とわたしの四人でごはんをおなかいっぱい食べたり、ニュースやサッカーの試合を見たりしてすごしました。大雨や道路のかん水のことなどすっかり忘れてしまうほどでした。

ねる時間がきました。外の雨のいきおいはおさまらず、大きな雷もゴロゴロなっていました。さっきまで楽しかった気持ちが小さくなり、また、不安な気持ちになりました。学校に備えてあったマットと、母の車につんでいたバスタオルでねることになりました。ちゃんとねむれるか心配になりましたが、教頭先生や母と弟もいっしょだったので、少し気持ちが落ち着きました。バスタオルではうすくて寒かったけれど、しょうがないと思いながら何とかねることができました。

「百葉、起きて。帰るよ。」

次の朝、五時に母がわたしと弟を起こしました。雨や雷が少しおさまり、道路のかん水もなんとか車が通れるほどになって、ようやく家に帰ることができました。わたしは、心から安心しました。

今回の大雨で、となりの小学校へ向かう道路が土砂くずれで通れなくなりました。近くの宇検村では、家に水が入ってきたり何か所も土砂くずれがおきたりしたそうです。その後何日も多くの人が災害で大変な思いをしていることを知りました。わたしが学校で不安な夜をすごしていたとき、たくさんの人が同じような思いをしていたのだと気付きました。

わたしは、初めての経験でとても大変な思いをしました。でも、学んだこともたくさんありました。それは、思いもしない災害に出会った時は、早めのひなんが命を守るために大切だということ。日ごろから、もしものときの備えが大事だということ。そして、何よりいっしょに泊まってくれた教頭先生や、大雨の中夕食を準備してくれた校長先生のように、もしもの時はお互いに助け合うことが大切だということです。これからも、いろいろな災害にあうかもしれません。もしものときのために、自分の命を守る行動を考えたり、自分にできる備えをしたりしたいと思います。そして、どんな時も困ったときはお互いに助け合うやさしい心をもちたいです。